

## Kの誕生

Kの誕生日が近づく頃、毎年あの時の事を心と思い出します。

Kを妊娠中27週の時、健診で切迫早産の診断を受け即入院となりました。入院してすぐは張り止めの飲み薬でしたがそれでは効かず24H点滴に切り替わりました。それから毎日ベット上で安静、ただそれだけ気をつけて過ごしていました。点滴していてもお腹は張ってしまい、周りも退院していくけれど（私はまだまだ無理だな…）と思い少し悲しくなったりもしました。先生には「お腹で一日一日育てているのはすごい事」と励まされ、「今日も一日お腹にいてくれてありがとう。」とあって日々を送っていました。入院生活は二ヶ月になりました。退院が近づく35週頃、点滴がはずれていよいよ退院の前日、その日の朝少しお腹の痛みがありました。「なんだろう？気のせいかな」と思っていたら、時間と共に痛みはどんどん強くなりました。（これは陣痛?!）と思いながら、ずっと痛みを耐え続けました。そして夕方、お腹に心拍を確認するモニターをつけるアラームは鳴りやまず（お腹の中で赤ちゃんが苦しんでいる、緊急で帝王切開になる）そんな内容だったように記憶しています。何が何だか分からずあつと言う間にOpe室へ行き、手術のため麻酔をして先生から足元へ冷たい物をあてられ「これ冷たい？」と聞かれたのですが、確かに冷たい感触は感じられ麻酔は効いていないようでした。先生達の（思いの他、麻酔が効かない）と言う会話も私には聞こえました。けれど助産師さんがお腹に機械をあてて「心拍が低下しています」と言う言葉を聞いた先生は「はじめます」と言っって手術が始まりました。そ

れと同時に「…痛い!!」と叫び、私の手を握っていてくれた助産師さんの手を力が抜けない程強く握っていました。今まで経験したことのない痛みでした。お腹から出された感覚も今でも覚えています。時間にして数分の出来事で、程なくして泣き声がかすかに聞こえ、私の意識はなくなつたようでした。Kはこうして産まれました。

Kの顔を見たのは出産から二日後、産んだ病院とは別のNICUのある病院にいました。手術の痛みと二ヶ月間安静だった私の体力はほとんどなく、車いすで会いに行きました。保育器に入ったKは、体重は2000gあったものの、すごく小さく感じられました。それでも何とか生きてくれて良かったのと会えた喜びとで涙しました。

あの日から6年、Kを見ながら「あの時はお互い大変だったね。今が元氣なら…。」と気持ちを落ち着かせていつもの日常へ戻ります。Kを通して色々な人に出会い、たくさん助けてもらい日々を過ごせることに感謝でいっぱいです。いこいさんでの卒園までの日々を楽しい思い出たくさん作って欲しいです。

Kくん（6歳）のお母さん